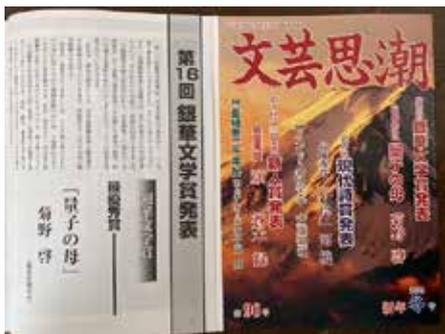


菊野啓さん 小説「量子の母」 第十六回 銀華文学賞 最優秀賞



文芸思潮 第90号掲載 受賞作『量子の母』

徳島文学協会の理事を務める菊野啓さんが、小説「量子の母」で第十六回銀華文学賞最優秀賞を受賞した。

同賞は人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものとして実施されており、第十六回は国内外から二〇七篇の応募があった。

作品は、主人公の男が、不可視の量子だまりから生み出されたホログラム映像の母と沖繩旅行をするというもの。選考委員の五十嵐勉氏は、大胆な世界を提示し、かつ小説作品として結晶させた、作家と文学の力を示した作品と評している。作品は文芸思潮第九〇号に掲載されている。

無価値なるもの

菊野 啓

たった一人にも読まれない小説は無価値だと考えているので、何かひとつ作品が仕上がったら、ちよつとイマイチかなと思う出来のときでも、必ずどこかへ出すことにしている。仲間うちの合評会のことあれば、その多くはダメもとで全国公募の文学賞へ。これで少なくとも無価値ではなくなった(笑)。しかも、読んでもらえたのは文学のプロ。選考委員の先生方はきつと怒るだろう。もつと乾坤一擲の作品を送ってこいよ、こちとらヒマじゃないんだと。すみません。ごもつともです。ですが、そんなふうにダメだと思っただけで出した拙作が、たまに予選に引っかけたりする(むしろ自分ではダメダメだと思っただけで作品の方が評価されたりする)と、それが本当にうれしくて。まるでどっちが岸かも分からない真つ暗な海をひとり泳いでいるときに、ぴかっと一瞬、灯台の光が見えたような。それでまた当分やる気が出ます。私にとって文学賞応募というのは、そういう意味合いのものなのです。なので、今回最優秀賞受賞という望外の幸運を手にしたあと、きつと変わることもなく応募しつづけるんだろうと思います。そして、そんなことをやっているうちに、自他共に認めるスノゴイ作品を、そう長くはないこの人生が終わる前に、たつ

たひとつでいいからモノしたい、というのが唯一の望みでございます。そのためには文章力を鍛え、長編をやり抜く泳力を身につけながら、どうしても書かねばならぬコトを、腹の中でマグマのように煮えたらせ、いつでも作品にぶち込めるように用意をせねばなりません。つまり、今やっていることはすべてこれから書く傑作のための準備なのであります。それがいかなるものなのか、自分でもまったく分かりません。短編なのか長編なのか、純文学なのかエンタメなのか、SFかひょつとしたら推理小説かもしれない。それがついに完成したとき、せめて無価値では終わらせないために、懲りもせずにもたまたま文学賞に応募することでしょう。そして、予選にでも引っかけたらものなら、大喜びして他人に自慢し、次こそは受賞じゃと鼻息を荒くして、新たな駄作に着手することでしょう。すべてはたつたひとつの傑作を残すための準備なのだと思いきや、果てのない文学賞応募地獄をつづけていくことでしょう。われながら困つたものですが、たまには今回のようにラッキーなこともあるので、まあいいかなと思つて、今日



著者近影

「民雄忌」北條民雄を偲ぶ会

が開催されました

阿南市出身の作家・北條民雄を顕彰する「民雄忌」北條民雄を偲ぶ会」が二〇二三年十二月五日に阿南市の夢ホールで開催された。

北條の童話「かわいいポール」を、夢ホールの加藤十館長が朗読劇に仕立て、奥田千紘さん、高田彩夏さん、村端賢志さんの出演、青山唯さんのハープで上演した。野犬狩りの男たちから、勇気を出して子犬を守ったミコちゃん、物語を情感たつぷりに朗読した。

その後、女優・作家・歌手として活躍する中江有里さんが「私が出会った北條民雄」の題で講演した。「週刊ブックレビュー」に携わり、体系的に文学を学びたいと考えて三十半ばで法政大学に入学。卒業論文を川端康成で書くとうとしていたときに、北條民雄と出会い、運命を感じて北條で卒業論文を書いた。3・11後の不安な気持ちがあったなか、一年かけてひとりの作家を考える、自分で問いをつくって自分で考えるという経験を経て、卒業論文を書くことは「生きるということと同じなんだ」と実感した。十年経って「100分de名著」の「いのちの初夜」で指南役として北條民雄と再会した。その十年の間に母を癌で亡くした。やせ

細つていく母の姿を目の当たりにして「いのちの初夜」を思い出した。最期まで希望を失わず生きようとする母から、人生の学びを得た。北條民雄も書くことが希望だった。人間はなにか縁（よすが）を持って生きているのではと思つた。今年の夏に自分も病気になる、いのちの危機を実感した。自分がどうなるかわからないときに小説を書くことの大変さ、北條民雄のすごさを改めて感じた。語り継いでいくのに相応しい作家だと思つたと話した。

後半では、中江さんと佐々木会長のトークが行われた。最後に北條民雄についてもう一度聞かれた中江さんは、「本当に揺れ続けた人、死ぬことができずに生きたことよって小説が書けた。生と死に揺れたことで小説が残った。ブレることは悪いことではない。これでもいいのかと悩みながら一歩踏み出していくことが大切」とまとめた。



徳島文学協会会長 佐々木義登著 「目指せ！文学賞」が出版されました

この度、徳島文学協会会長の佐々木義登が執筆した「めざせ！文学賞」が徳島新聞社より出版されました。

【佐々木会長よりコメント】

本書は初めて小説を書く人、また書き始めて間もない人、自分の楽しみのために趣味で小説を書いている方に、ぜひお手に取っていただきたい本です。

著者の実体験などもふんだんに取り入れ、初心者にも分かりやすく親しみやすい文体と内容にしました。

著者がこれまで大学の授業や、一般向けの小説創作講座で指導してきた内容、徳島新聞紙上にて発表した記事内容などからエッセンスを抽出し、文学作品とは何かという大きな疑問から、作品を書く上での心構え、実際に書く手順、執筆する際に応用できるスキル、

推敲の仕方、応募の方法まで、具体的にかみ砕いてレクチャーしています。



ご購入は
こちらから



阿波しらすぎ文学賞 終了

全国公募の掌編小説コンクール「阿波しらすぎ文学賞」を主催する徳島文学協会と徳島新聞社は、令和五年十二月十八日、同年に開催された第六回を最後に作品募集を終了することを決定しました。

全六回を通して、国内外から多くの方にご応募いただきました。素晴らしい作品をお寄せいただいた皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

週三回、雨の日を除けば、我が家から車で五分の場所にある鳴門ウチノ海総合公園に行ってジョギングをしている。齡をとるとお金も大事だが何を差し置いても心身の健康が肝心かなめであると思っている。身体が丈夫でなければ、いくらお金があつても宝の持ち腐れのような気がするのである。健康だからこそ、お金の使い道も生きてくるのではあるまいか。公園に行くと、およそ二時間ジョギングをしたり、ウォーキングをしたり、内の海に面して置かれている大理石のベンチに座って鏡のような海を眺めている。公園には四季の移ろいを感じさせてくれる様々な草木があり、退屈することがない。春になれば桜が満開になるし、夏にはハマボウの木々が黄色い五弁の花を咲かせている。広い花壇は春になると菜の花やチューリップ、夏にはヒマワリ、秋にはコスモスといった多彩な季節の花で彩られる。春の菜の花、秋のコスモスが黄色や赤やピンクの色彩で花壇を埋め尽くすと、そこでは家族連れやカップルがスマホを片手に自撮りに励むようになる。そして、そんな中にちらほら若い女性の二人連れの姿を見か

けることがある。すると、高級そうなカメラを肩にぶらさげた初老の男性がそれらの女性に声かけをし、写真を撮り始める。女性たちは嬉しそうにその男性の指示に従って、ポーズをとっている。そんな光景を見ながら、なるほどそんな手もあるのかと得心してしまふ。齡をとると若い女性に接する機会は無とっていい。だが、花を介しなくては若い女性と簡単にコミュニケーションがとれそうである。公園内では犬の散歩も頻繁になされている。見ず知らずの人たちが飼い犬を介して楽しんでるに会話を弾ませている。美しい花や可愛い犬は、人間の邪心を追い払って良心を膨らませてくれる効能があるようである。

暖かくなったら、早速カメラを買おうか、犬を飼おうか、迷っている。

【エッセイ】 徳島文学協会に入会して

大谷 薫

思うところあり、数年前に徳島文学協会に入会した。やりたいことをやるために、修行が必要だと思っただけだ。文章・小説を書くのは容易ではない。短編小説講座を受け始め、協会の皆様には大変お世話になっております。講座では文学協会同人の方の小説作

品、プロの方の短編をメールでデータ送信していただき、毎回二作品を読んでも参加。講座では感想を述べ合う、という合評形式である。感じたことをどのように言葉で伝えればいいのか、まづここからわからない。参加者の方の評を聞くうちに、なるほど、こういう風に言えればいいのかと。圧巻はラストの佐々木先生の講評である。例えば、原作者の方の前で、全裸で現れるのは、若い女性ではなく、汚い太った中年のおっさんか、うらぶれた五十才くらいの女の方がいい等、具体的な指導があつたり、文章を小説として成立させるための心得など、示唆に溢れる、含蓄に富んだ話を聞くことができる。会の後で熱心に指導をうけている方もいる。まさしく、スーパーバイザーとはこういう方のことだと、その文学への熱い思いに触れ、すっかり感服させられるのであります。

やりたいことを周りの人に言葉にして言うことと実現できることがあるという。身近な人に〇〇がしたいと話す。数人の友人知人に話した後、「話す」ハナスとは「放す」ということに通じ、放した思ひは叶わなくなるという説を知り、愕然とする。要は、本気でやる気があるのか、実行力があるのか、意志の有無、その強さに尽きるのだと思うのです。

全てのことは放物線を描く。我が身においても然り。自分の年を文字で書き、驚く。一体いつの間にこんな年になったのか。体力、気力、集中力、持続力、その全てにおいて急降下しているのを感じる。急がねばならん。生きている内に、思っていることができんと、思う今日この頃であります。

【エッセイ】 初冬の散策

七色 ぴあの

十一月下旬「これぞ小春日和！」と言える平日の昼間に、友人と散策に出かけた。行き先は四国八十八箇所霊場五番札所の地藏寺と、五百羅漢堂だった。目的は、短歌創作のためのネタの収集。最近、不作気味で困っている。

県道三十四号線と交差する道を右折して間もなく、おおきな銀杏樹が見えた。路肩に車を止め、遠景でもきれいに黄葉しているのがわかる一枚を撮った。ここで短歌を詠むための見方と心、あるいは脳へのギアチェンジが完了した。

専用の駐車場に停め直して仁王門をくぐると、境内には思ひおもいに黄葉を染みむ人がいた。本尊の地藏菩薩さんを拝み忘れたまま、仁王門のそばの修行大師御尊像さんと、樹齢約八百年

の大銀杏を仰いだ。銀杏樹の下から空を見たり、落ち葉を拾ったり、幹に触れたりした。いろいろな角度からiPhoneを翳して撮った。また、八百年を支えてきた根は長く、太く波打っていた。根のまわりは赤白の三角コーンが置かれていたが、幾人もが触れてきた根に違いないと思い、わたしも屈んで触れてみた。根は土を被っていて、すこし埃っぽい感触だった。とてもありがたく感じて、長く樹のそばにいた。御利益がありそうな気がした。長寿の木魂と交信できたに違いないと嬉しく思った。

地藏寺の仁王門を出て西側へまわり、奥の院の五百羅漢堂へ行った。長い石段は整備されていて、途中のあかるく展けているところには銀杏樹があった。地藏寺の大銀杏とは種類が違うのだろうか、背は低く、若そうに見える。金色の葉が音をたてて絶え間なく降っていた。与謝野晶子の名歌「金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に」／『みだれ髪』の一首を思いながら、この風景も動画に残した。厳かな赤に色づいた、もみじの落ち葉は持ち帰った。名前のわからない木があれば「何の木かな？」と言いたい、お互いの思いや願いや祈りには触れず、風や鳥の声を聴いた。木造で

等身大の羅漢像が並ぶお堂は参拝せず石段を降りた。空と町がきれいだった。願いはいつか叶う気がする。短歌の材料になるきれいな風景をたくさん見て、iPhoneにも撮った。昇華させたい。後日、等身大の羅漢像が日本最大級の規模だと知った。春には梅が楽しめるという。水琴窟も見忘れていたので再訪したい。

【短歌】 蜂蜜

うっかり

蜂蜜の速さで進みゆくものに二十年後の愛があります

二人して信じていたい蜂蜜が世界で一番甘いことか

空瓶に冬の夕陽を閉じ込めてカロリーゼロの蜂蜜にする

【短歌】

峯菜実子

「いませんねえ」心で話す 双眼鏡さげた女性と間隔開けて

冬鳥が好む赤い実採ってきて「食べてもいい？」と訊く子どもらよ

子どもらの悲鳴気にせずシマヘビは優美なS字見せびらかして

会員の皆さまの活躍

会員の皆さまが受賞された文学賞をご紹介します。文学賞を受賞された方は事務局までご連絡ください。詳細は「とと」六ページをご覧ください。

■第十六回銀華文学賞 最優秀賞

「量子の母」 菊野啓

■第二十一回とくしま文学賞

脚本部門 最優秀

「満ち満ちて、群青」

元木理恵

現代詩部門 最優秀

「眼」 うっかり

短歌部門 優秀 永田愛

現代詩部門 佳作 青野佑季

短歌部門 佳作 峯菜実子

短歌部門 佳作 ミスミアヤカ

短歌部門 佳作 青野佑季

川柳部門 佳作 のやまきのこ

■第二十四回

とくしま随筆大賞 奨励賞

「小学五年生」 七色びあの

「とと」：古代エジプト文明の知恵の神

「トート」に由来する。

掲載作品募集

会員の皆さまの積極的な応募をお待ちしています。

「ニューズレター」「とと」

原稿はワード形式で事務局へお送りください。(送信時には件名に『とと掲載用』と入れてください)

- ◆エッセイ等 八百字以内
- ◆詩 四百字以内
- ◆短歌 三首以内
- ◆俳句 三句以内

「とと」は年二回発行ですが、一回につき掲載できるのは四作品程度です。先着順で掲載できない場合は次号に回します。

ホームページ「作品広場」

原稿はワード形式で事務局へお送りください。小説、エッセイ、評論、児童文学、詩、俳句、短歌などオリジナルの作品に限ります。

最新掲載作品

現代詩 「銀杏の老後」他二篇

伊勢さき

作品、募集要項はホームページで

<https://www.t-bungaku.com/plaza.html>



みんなの文芸誌「カクヲタノシム」vol.4 原稿募集

どなたでも無料でご参加いただける特集ページもご用意しました。

特集1

私のつぶやき

ツイッターやインスタグラムにつぶやくみたいに。できれば写真やイラストを添えて下さい。(掲載時はモノクロとなります)

- お名前(ペンネーム可)
- ひとこと
- イラストや写真
- 画像データをメールに添付
- イラストの場合はハガキか封書でも受付(返却は不可)

特集2

みんなの本棚

好きな作家や本(ジャンル不問)について語って下さい。

- タイトル
- 本の名前や作家名でなくても構いません。
- お名前(ペンネーム可)
- 四〇〇字以内の紹介文

特集3

フリー四百文字

エッセイやコラム、近況や活動報告、短歌や俳句・詩などの作品発表の場にも。自由にお書きください。

- タイトル
- お名前(ペンネーム可)
- 本文四〇〇字以内(縦書きで掲載)

※全特集に参加できます。但し一つの特集には一人一作まで。

※特集②と③は、メールのみ受付『カクヲタノシム』と記載

掲載原稿募集

ジャンル不問。ご参加ご希望の方は、メールまたは電話で協会事務局までお申し込みください。

参加掲載料

- (枚数は四百字詰原稿用紙換算枚数)
- 詩五枚以内 一〇〇〇円
- 俳句 二十句まで 一〇〇〇円
- 短歌 二十首まで 一〇〇〇円
- 小説・児童文学・エッセイ・書評・コラムなど二十枚まで三〇〇〇円

※二十枚以上一枚追加ごとに百円追加
原稿は編集委員が拝見し誤字脱字等をチェックいたします。小説部門は担当編集者が推敲し、一緒に仕上げてください。ご了承ください。

◆プラス三千円で非会員の方もご参加できます。

原稿受付期間

2023年10月～

2024年2月末

※『カクヲタノシム』とメール件名に記載してください。



ご応募いただいた方と会員の皆様全員に一冊無料進呈。

バックナンバー(創刊号・2号)を販売しています。
※3号は完売しました。税込660円+送料。

四国大学 第二回 瀬戸内寂聴 青春

エッセイコンクール

四国大学主催、徳島文学協会協賛で運営する「四国大学第二回瀬戸内寂聴青春エッセイコンクール」は、応募総数一〇二作品の中から厳正な審査を行い、大賞、優秀賞、奨励賞の各賞が決定した。

大賞(一作)

「楽器は歌う」 相原真心

徳島県立川島高等学校【徳島県】

優秀賞(三作)

「元夫婦の話から」 松本陽菜

三重県立松阪高等学校【三重県】

「過去・現在・未来」 額田幸来

神奈川県立鶴見高等学校

【神奈川県】

「空」 友成彩由花

徳島県立脇町高等学校【徳島県】

大賞については、受賞者の言葉と受賞作品が、徳島文学協会発行の文芸雑誌『徳島文学』に掲載される。

四国大学 第四回

富士正晴全国高校生 文学賞

四国大学主催、徳島文学協会協賛で運営する「四国大学第四回富士正晴全国高校生文学賞」は、審査対象となった三三三作品の中から厳正な審査を行い、大賞、優秀賞、奨励賞、佳作の各賞が決定した。

大賞(一作)

「ねこの手・わたしの手」 本多奈恵

梅花高等学校【大阪府】

優秀賞(三作)

「浸水」 白川こと

岩手県立水沢高等学校【岩手県】

「フィルムに向こう」 伊藤茜

岩手県立花巻北高等学校

【岩手県】

「乾杯」 大河原優希

就実高等学校【岡山県】

大賞については、受賞者の言葉と受賞作品が、徳島文学協会発行の文芸雑誌『徳島文学』に掲載される。

事務局だより

いつも会員みなさんの作品を楽しみにしています。「とと」とホームページの「作品広場」ではみなさんのご応募をお待ちしています。

文学イベント案内

一部の講座に関して、非会員の皆様のご参加が可能になりました。
会場と Zoom 開催の両方で受付しているものもございます。
お申込みの際に、どちらでご参加するかお申し出ください。

徳島文学協会ホームページ
イベント情報



短編小説講座

初心者から、短編小説の書き方を極めたい方まで、どなたでもご参加いただけます。参加者の作品を組上に載せて合評したり、プロの作品を取り上げ講師が講義を行ったりします。

* 未完成作品の提出はご遠慮ください。

- 開催日 ①4月6日(土) ②7月20日(土)
全回19時～20時
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催(ハイブリッド開催)
- 場所 徳島県立文学書道館
- 参加費 会員のみ対象
作品提出: 会員3,000円/学生会員1,000円
参加のみ: 会員1,500円/学生会員500円
- 提出作品 原稿用紙50枚位まで
- 講師 作家・四国大学教授 佐々木義登
- 定員 15人程度
- 締切 開催日の10日前まで(先着順)

作品の提出方法

Microsoft Word ソフトで書かれた小説(400字詰め原稿用紙換算50枚程度まで)を事務局宛てにメール添付でお送りください。

小説エキスパート講座

全国公募の文学賞で最終選考程度の実力のある方やプロの作家を目指している方。また、作品を提出した上で講師からの指名があった方を中心に、本格的なスパーリングを行います。参加のみはどなたでも可能です。

* 未完成作品の提出はご遠慮ください。

- 開催日 ①5月25日(土) ②8月24日(土)
全回21時～22時
- 開催方法 『Zoom』による開催
- 参加費 作品提出: 会員3,000円/学生会員1,000円
参加のみ: 会員1,500円/学生会員500円
非会員2,500円*
- 提出作品 原稿用紙50～200枚
- 講師 作家・四国大学教授 佐々木義登
- 定員 10人程度
- 締切 開催日の10日前まで(先着順)

作品の提出方法

Microsoft Word ソフトで書かれた小説(400字詰め原稿用紙換算50枚から200枚程度)を事務局宛てにメール添付でお送りください。

「私のイチオシ本」

お気に入りの小説やマンガなどを持ち寄り、1人1作品、持ち時間5分でプレゼンします。作品の魅力に改めて気づいたり、読書の幅を広げることができます。

- 開催日 3月2日(土) 19時～20時
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催(ハイブリッド開催)
- 場所 徳島県立文学書道館
- 参加費 会員のみ対象 500円
- 定員 15人程度

*プレゼン後の投票で1位に選ばれた方は、ととに書評(1000字程度)をご寄稿いただきます。お礼として500円の図書カードを差し上げます。

※非会員の方のご参加について

「小説エキスパート講座」「エッセイ講座」は、非会員の方にもご参加いただけます。
ご参加希望の方は事務局までメールでお申込みください。

【ご参加の条件】

- ①Zoomの基本的な操作ができる
- ②事前に参加費を支払う(振込手数料はご負担ください)

- 講座参加費と作品提出料は、後日とりまとめた上、請求書と払込取扱票を年2回お送りいたします。
- Zoomでの参加方法がわからない方に、無料でサポートしています。お気軽にお問い合わせください。

エッセイ講座

どなたでも文章スキルを身につけることで、素敵な文章が書けるようになります。参加者の作品を組上に載せて合評しながら、人を惹きつけるようなエッセイの書き方をお伝えします。

- 開催日 6月15日(土) 19時～20時
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催(ハイブリッド開催)
- 場所 徳島県立文学書道館
- 参加費 会員・非会員※ 1,500円
- 講師 作家・四国大学教授 佐々木義登
- 定員 15人程度
- 締切 開催日の10日前まで

作品の提出方法

Microsoft Word ソフトで書かれたエッセイ(400字詰め原稿用紙換算5枚程度)を事務局宛てにメール添付でお送りください。

ご入会や講座のお申込み・お問合せは 徳島文学協会事務局まで

〒771-3201 徳島県名西郡神山町阿野字方子 103
TEL : 080-6284-0296 society@t-bungaku.com
<https://www.t-bungaku.com/>

【文学賞等に受賞された方はお知らせください】

会員の皆様のご活躍を、「とと」や徳島文学協会のホームページでご紹介します。

小説、俳句、短歌などの文学賞を受賞された方は、事務局までメールでご連絡ください。賞の目安は授賞式に出席する程度です。

ホームページには小説のみ、「とと」には全てのジャンルの受賞実績を掲載予定です。(紙面の都合上、全てを掲載できない可能性があることをご了承ください)